

近世の検見制と徴収仕法の特質

渡 邊 忠 司

はじめに

零細で小規模な高持百姓が大部分を占める近世百姓の「成立」^{なりたち}は、近世領主層が自ら拠つて立つ、また年貢米徴収の基盤として最大の関心事であつた。「苛斂誅求」などと表現される年貢米徴収の過酷さは、それをほとんど唯一の収入源とする領主層からみればしごく当然といえるが、領主自身はそのために百姓が潰れては自らの存立が危うくなることも十分自覚していた。

その意味において、領主層は百姓経営の存続と維持に無関心でいることはできなかった。たしかに、近世においては「百姓成立」が領主側の政策で「保護」されていた側面があることは否定できない。その観点から、「百姓成立」が政策による「保護」でいかに実現され、安定した状態を保っていたかを確かめることは重要な作業であらう。^①徳川政権は寛永五年（一六二八）以降、百姓の食衣住および田畑の耕作に関わる種々の制限・禁止、強制を含む法令を発令したが、これはたんに百姓の規制・束縛だけではなく、「農耕専一」を強制して「成立」を維持させるための保護・育成的な側面を有していたとみることができる。^②

同様に、徴租法においても、天正一四年（一五八六）正月に秀吉が法令を発令して以来、元和二年（一六一六）成立とされる『本佐録』でも、「天下の根本」である百姓にまずは一年の入用を確保させたくて余分を年貢とし

て徴収するようにと指示しており、百姓成立を前提とすることは近世領主層の共通認識であった。⁽³⁾

本稿では、近世徴租法の中核である畝引検見制が年貢米の徴収方法であるとともに、百姓の経営を保護・育成する側面を強化した徴租法であることを検証する。その保護・育成という特質は畝引検見制の仕法そのものにあるが、それが石高制を前提とすることで、百姓保護の条件がさらに強調されたことにあつたとみることができるのである。この点を検証してみたい。

近世の検見制には、徳川氏直轄領を中心に色取検見・畝引検見・有毛検見があつた。その原点は豊臣政権の相対立毛検見・二公一民制であるが、⁽⁵⁾ 検見制の視点からみれば作柄の調査と収量確認の仕法に大きな違いはない。またその年々の作柄の善悪を判断する基準は、検地で確定された上中下などの田畑等級と、それに対応した反別一反当たり上田一石五斗、中田一石三斗、下田一石一斗などの石盛であり、これも大きな差異はない。

近世の検見制は検地で確定された田畑の等級と、それに対応した反当りの石盛・石高、それが一筆ごとに記載された検地帳に基づいた年貢賦課と徴収が原則であつた。これは領主の側からすれば、検地を仕直さないかぎり領主自身が旧来の検地帳から離れた年貢の賦課・徴収を不可能としたことを意味している。⁽⁶⁾

検地は百姓を年貢米の生産者・負担者として土地に緊縛した、また村の居住者として固定したと評されるが、それは領主が百姓を基盤にしてしか存在できなくなったことを意味している。「天下の根本」はまさに領主の実感であり、その表現である。その事実を前提に、年貢徴収仕法を捉え直すと、徴租法が必ずしも「苛斂誅求」と呼ばれるような強烈な年貢・諸役徴収の面だけではない、百姓の生活と経営を確保したうえで年貢米の徴収という「保護」的側面⁽⁷⁾が見えてくるのである。

ここに、徳川政権が徴租法として畝引検見制を用いた意味がある。「百姓成立」を実体化するためにこそ用いたのである。これは畝引検見制の特質でもあるが、これらをあらためて検証するために、以下では、①近世の検見制

の仕法、②畝引検見制の仕法の再検討を行い、その実態を③在方の検見帳の分析によって確認する作業を行う。特に『地方凡例録』の解説に拠りながら、「百姓成立」において近世徴租法が果たした役割を検証する。⁽⁸⁾

一 近世検見制の特色

検地と石高制は近世の年貢を米納年貢制に統一した。そのため年々の作柄を調査する検見制の整備を促し、「毎年立毛の上を以納事」（『本佐録』）が基本となった。ここに領主・百姓双方にとって年々の実収量の確定が重要な関心事となった根拠があり、近世の徴租法において検見制の仕法が重要な位置を占めている根拠がある。

色取検見・畝引検見・有毛検見は、検見制からみれば作柄の査定という点では仕法的には基本的に同じである。

また秀吉の規定した検見制が近世を通じて用いられたことは、『地方凡例録』の検見制の規定にみられる。そこには「検見」とは、「田方立毛見分の上坪刈を致し、稲の豊凶に随ひ租税を極ること」とあり、秀吉の規定した「舛つき」（升つき）と有米の確認が「坪刈」（歩刈）によることを明記し、さらに具体的な規定と仕法の解説を行っている。また作柄判断の基準も田畑等級と石盛である。さらにそこで強調されていることは、検見での歩刈・「坪刈」の重要性である。⁽⁹⁾

全体検見ハ視・観・察の三を以て、村々に応じて取箇の増減を心中に弁へ、其上下に云ごとく其年の豊凶并に、前年取箇の強弱を考へ、其外村々の模様に従ひ、増減を大凡に極め置て、歩刈をいたすべし、尤も坪刈ハ用ひて用ひざること、前々云ことなれども、古来より検見第一の法とするハ坪刈なり、地頭ハ之を以て損益を積り、百姓ハ之に依て年貢を出すべき法を知り、上下の見当にいたすは此坪刈のミなり、

ここでは、坪刈（坪刈）が用いられるべき仕法であるのに用いない場合もあることを指摘しながら、それでも坪刈が

表1 摂津・河内地域村々の合毛

十八条村(寛延三年)			海老江村(天保六年)		東出戸村(享和三年)	
合 毛	石高	反別	合 毛	反別	合 毛	反別
上 田	石 121.410	畝 809.12	上 田	畝 3895.09	上々田	畝 248.25
苧	11.305	75.11	苧 上	389.10	早稲苧上	44.05
早 稻	21.120	140.24	一合五勺毛	214.08	三合毛	38.21
七合毛	46.445	309.19	一合毛	1656.20	二合毛	44.22
六合毛	14.575	97.05	五勺毛	1185.04	一合毛	118.03
五合毛	12.385	82.17	附 荒	449.27	木綿作	3.04
四合毛	6.030	44.06	中 田	2648.00	上 田	941.11
三合毛	2.550	17.00	苧 上	205.01	三合毛	111.00
二合毛	0.750	5.00	一合五勺毛	284.25	二合毛	303.07
木綿			一合毛	1232.23	一合毛	276.13
20斤吹	2.795	18.17	五勺毛	692.24	木綿雑毛	250.11
15斤吹	2.475	16.15	附 荒	232.17	中 田	26.12
5斤吹	0.390	2.18	下 田	1356.23	苧 上	2.00
中 田	7.471	57.14	苧 上	104.10	一合毛	24.12
苧	0.771	5.28	一合五勺毛	70.11	下 田	59.15
早 稻	1.361	10.14	一合毛	355.28	早稲苧上	6.00
五合毛	2.695	20.01	五勺毛	507.10	二合毛	10.00
木綿	附 荒 318.22		一合毛	43.15		
15斤吹	0.275	2.03	下々田	1390.19		
10斤吹	2.375	18.08	苧 上	41.24		
下田	0.870	7.11	一合五勺毛	70.26		
早稲	0.266	1.29	一合毛	236.15		
六合毛	0.290	2.19	五勺毛	517.07		
五合毛	0.301	2.28	附 荒	324.07		
下々田	20.288	338.04	下々下田	777.13		
苧	0.746	12.13	苧 上	28.17		
早稲	1.524	108.22	一合五勺毛	50.11		
七合毛	2.890	48.05	一合毛	159.07		
六合毛	1.174	19.17	五勺毛	349.13		
四合毛	7.334	122.07	附 荒	189.25		
三合毛	1.620	27.00				

備考：史料は各村の表に示した年次の内見帳による。

「古来より検見第一の法」であること、検見の仕法の中核であることを改めて確認している。坪刈は地頭(領主)にとっても百姓にとっても、当該年の作柄を確定し相互の取り分を確定するために最も重要な仕法であり、検見仕法の中核であった。これを秀吉は近世領主としての確に拾い上げ、体系化した。また、それを踏まえて家康(徳川政權)も同じ立場で検見制を確認した。それが『本佐録』にいう「古の聖人の法」で

表2 十八条村・海老江村・東出戸村の内見高内訳

村 名	十八条村		海老江村		東出戸村	
	石 高	反 別	石 高	反 別	石 高	反 別
村 高	石 307.385	畝 3133.28	石 1363.615	畝 10909.09	石 661.453	畝 5078.08
上々田	—	—	—	—	37.325	248.25
上 田	121.410	809.12	584.292	3895.09	31.791	941.11
中 田	7.471	57.14	314.240	2648.00	3.165	26.12
下 田	0.870	7.11	149.244	1356.23	5.950	59.15
下々田	20.288	338.04	125.157	1390.19	—	—
下々下田	—	—	54.420	777.13	—	—
畑 高	100.636	1318.21	106.261	841.05	395.421	3178.11
屋敷高	10.335	79.15	54.942	422.19		

備考：各村の表1の内見帳他による。なお単位は反別は畝で表示した。
また東出戸村は他に検見済87石801(反別623畝24)がある。

表3 石盛一覧

	十八条	海老江	東出戸	江口村	下馬伏村
上々田	—		一石五斗	一石四斗	
上 田	一石五斗	一石五斗	一石四斗	一石貳斗	一石五斗
中 田	一石三斗	一石三斗	一石貳斗	一石	一石三斗
下 田	一石一斗	一石一斗	一石	八斗	一石一斗
下々田	六斗	九斗	—	—	—
下々下田	—	七斗	—	—	—

備考：各村の内見帳および明細帳による。

ある。「坪刈」は、秀吉の法令では「舛つき」による有米の確認と表示され、『地方凡例録』では「有粃」の確認と表示される。字義のとおり一坪（歩）の範囲を刈り取ることである。また「舛つき」とは、稲を粃または米にしてその量（粃量）を量り、実収量を確認することであり、一般的にいう「舛法」である。いずれも坪刈に必須の仕法である。

そこで、まず近世検見制の仕法について、『地方凡例録』によつて確かめておきたい。表1は、摂津・河内地域の村々の内見帳・毛見帳・毛揃帳から作成した合毛表である。これらは年次は異なるが、いずれも毛見・坪茹、舛つきによつて有粃を確認し、それに基づいて一坪の粃量を算出した結果である。これを前提に

して、当該年の作柄が判断される。また表2はこれらの村の村高・反別を田品等級ごとに示し、表3はその田方の石盛一覽である。これらを参照しながら、検見制の仕法について検証していこう。

表1は検見合毛の内訳である。表には田方のみの合毛を示したが、畑方も綿作の内見があり、内見帳にはそれぞれ上中下に分けて表示されている。合毛は坪苧によつて算出され、上田・中田・下田それぞれに七合毛から一合毛等までである。この合毛によつて当該年の作柄の善悪を判断する基準は、徳川政權下においては「根取」であつた。『地方凡例録』では、検見制による年貢米の算出は一般的に五合摺・五公五民が原則であることを前提に詳説されている。この原則ゆえに、田方上中下の斗代に相應する粍量はそれぞれ三石・二石六斗・二石二斗となり、これらを脱穀すると、五合摺で米量はそれぞれ二分の一石五斗・一石三斗・一石一斗となる。これを五公五民で計算すると、それぞれ七斗五升・六斗五升・五斗五升が年貢米となり、これを「根取」といい、近世領主取分の基準であつた。¹⁹⁾

坪苧は刈り取る場所を決めることから始まる。苗代田・肥し場を除いて、立毛を見て（毛見）出来方が平均的な田方を選び、そこに一間四方の枠をかけてその一坪を刈り取る。枠は竹製で、一間は六尺一分である。ただし文禄検地以来検地施行がない場所は一間が六尺三寸とか、地域によれば六尺五寸の場合もあり、地域の先例に応じた間竿が用いられた。坪苧の場所は、同じ場所であつて二坪を刈り平均して一坪の粍量を出すと公正さが保たれること、また田方上中下それぞれで三坪づつ、合計九坪から一二坪を刈り取つて「目様^{めさま}」を行うとより正確な実収の確認ができることを強調している。²⁰⁾ 表1の合毛はその結果であるとみてよい。

『地方凡例録』には、それが古来からの仕法であつたが、寛政期にはそれがなくなり、三坪か四坪を刈り取つて粍量の確認をするようになってしていると記されている。つまり、本来の坪苧は、田品に応じてそれぞれに複数箇所の坪刈を実行することが当然であつた。

また刈り取りは百姓二人が行い、刈り取つた稲は百姓には持たせないで、代官所の足輕・小者に持たせて品種・

刈株数を書き付け筵に包み、封印を付けて運ばせた。一か村の検見が終了した時点で粃にして、収量を確かめ、作柄の確定を行ったのである。このとき判断の基準となる基礎的な収量が田品・等級、石盛および根取であった。

これを極めて単純化して考えると、上田一反一石五斗の場合、これを単純に三〇〇坪（歩）で割ると一坪当たり¹⁴の収量が五合となるが、坪苅の収量が五合より多ければ作柄は基準高以上であるから豊作、五合以下であれば不作ということになる。坪苅による有米量を基準にして当該年の作柄を把握し、それに応じた租率と年貢高を決定する。つまり検見の目的は一坪分の稲の刈り取りと脱穀による実収量の確認、そのうえでの作柄の確定であった。いづれにしろ、検地で確定された田品等級・石盛・斗代が基準であった。

これらは、検地による田品・石盛を前提した検見制によって年貢徴収が遂行されるかぎり、百姓が検地「石高以上の年貢を徴収されないことを意味している。それが近世検見制の仕法の特質である。これに不作・凶作、損耗があれば、それに応じた免除を与える。それが検見引である。検見引は作柄の損耗がなければ設定されない。近世の検見制は本来は田品と一筆ごとの石高設定を上限として、それ以上の年貢米を徴収することのできない徴租法であった。近世の検見制では、検地による田品・石盛に忠実に従った検見制は畝引検見制であった。『地方凡例録』は有毛検見と対比しつつ、「古来」の検見制として畝引検見の特色を記している。畝引検見制の仕法の詳細な検討は次項に譲るが、特徴的なことは、検見引の仕方が畝引と有毛では相違していたこと、それが免状には「検見引」と「皆無引」と表示されたと注記していることを、ここでは確認しておきたい。¹⁵

検見高引ハ、古来畝引検見の節ハ、損耗丈の高を検見引と唱へて高にて引たれども、有毛検見にてハ、反取・厘取とも根取の定めなきに付、検見減の分ハ取米にて引き高にてハ引ず、皆無高許りを引く、

古来、つまり近世中期の寛政期からみると近世の初期の検見制は畝引検見であったこと、その際の検見では、作柄の豊凶による「損耗」引が検見引として免除されていた。当該年の実収量が検地基準収量に達しない場合は、年

貢賦課・徴収においてそれに対応する高（反別）が差し引かれていた。これによれば、当該年の作柄は上田ほかの根取を基準にして、収量の多少とそれに応じた作柄の豊凶が判断されることになる。ただし有毛検見では田品・等級、石盛が無視され、実際の米収量を基準に収納量が確定されるから、根取も当然無視されることになる。¹⁶⁾

検見制という徴租法が「百姓成立」として重要な意味を持つているとすれば、それは検見で確認された実収量と、それによる作柄の判断の仕方、年貢高・租率の設定の仕方にある。さきに指摘したように、検地による田品・石盛の基準量を超過または下回った場合、年貢高・租率はいかに設定されていたのか、である。つまり収量が検地による規定収穫高より少ない場合、年貢賦課・徴収が免除されるが、この除外部分が免状に検見引と表示されるから、百姓の「成立」としては、検見引を伴う徴租法であるかどうかが重要であつたといえよう。

二 内見・検見と合毛付

近世の石高制と米納年貢制に対応した検見制は畝引検見制であつた。これはこれまでの研究で夙に指摘されてきたことである。¹⁷⁾ 検見制は検見引を伴う徴租法であつた。「立毛見分の上坪刈」の仕法は、色取・畝引・有毛いづれの検見制にも共通であるが、そのうえで検見による実収量の増減に応じて、石高を基準に不作・凶作による損耗に応じた引高を設定して年貢賦課・徴収をした検見制が畝引検見制であつた。

『地方凡例録』では「畝引検見之事」と題して詳説している。その仕法は田方上中下の位とその根取米に従つて作柄を判定することが基本であり、検地石高、等級と石盛、斗代、根取米を前提に、上中下の田方等級それぞれで検見を行い実収を確認する徴租法である。¹⁸⁾

畝引検見は古法にて、田方上中下とも村々根取米の極りあり、仮令バ上田は壹反に取米七斗五升、中ハ六斗五

升、下は五斗五升など、右に記す、石盛に幾箇取として、壹反歩より納る取米の定りありて、之を根取と云、右上田の根取米七斗五升到、五合摺五公五民の法四を掛けて、粃に直し三石と成る、壹反の坪數三百歩にて割れば、壹歩の粃壹升到當る、中田は八合六勺六才六、下田は六合六勺六才六、是根取の當り合なり、右の粃丈あれば検見不足なき處、損毛にて壹歩に粃平均八合あり、上田の根取に貳合不足し、中下とも夫々検見歩疇いたし、何れも不足なれば、總勘定にて取米何拾何石の不足に成に付、右不足丈け反別に直し、親反別の内より検見引と記して之を引、残り反別に根取米の反當りを掛けて、取米を仕出す、之を畝引検見、又ハ反取検見と唱ふ、ここには上田・中田・下田の根取米とそれを粃量に直した「當り合」、それと實際の粃量との關係から検見不足の有無を確認する方法が明解に示されている。不足分は「損毛」として、それに相當する反別（石高）に直し、検見引として差し引き、残り反別（殘高）に根取米を掛けて取米を算出する。畝引検見は不作分を引くことに力点を置いた徴租法であつた。そこに近世前期の徳川政權の百姓政策に対応できる徴租法としての特色があつたといえよう。百姓に年間の入用を確保させてその余りを収納させ、百姓を「保護」・育成する徴租法としての特質である。

その意味では、「百姓成立」とその構造を徴租法の側面から検証する際には、畝引検見制の仕法の検証は不可欠な作業である。その作業の第一として、實際の検見の記録によつて、検見の実態を検証することから始めよう。

近世の検見は、領主による検見の前に百姓・村による「内見」があつた。内見とは、庄屋・年寄・百姓代と地主（高持百姓）立ち会いによる百姓と村方の検見であり、毛見・坪疇・有粃（米）の確認という仕法は同じである。この結果の記録が内見帳で、領主に差し出される帳面である。領主はこの帳面を基に村役人と地主（いわゆる高持百姓）の立ち会ひのうえで領主の検見を実施する。¹⁹

享保一四年（一七二九）の河内国茨田郡下馬伏村（大阪府門真市）では、領主の検见到先立ち村方で内見を行い内見帳を作成し、庄屋・年寄および百姓二名が連署して平岡彦兵衛代官所に差し出した。²⁰

右之通当酉年内檢之儀、庄屋・年寄・下見之者誓詞之上惣百姓立合毛附仕、尤所々ニ而歩刈・目ためし仕、田毎之立毛帳面ニ引合、少茂無相違、毎田建札仕、御見分御案内仕候、若御見分之上合附相違之儀御座候、如何様之曲事ニ茂可被仰付候、以上、

享保十四年

閏九月

河州茨田郡下馬伏村

庄屋 四郎右衛門

年寄

太右衛門

百姓

四 平

百姓

源 兵衛

平岡彦兵衛様

御役所

内見帳の奥書である。ここには、百姓の内見が歩刈・目ためし・合毛付など検見の仕法に従って毎年施行されていることが記されている。これを用いた領主の検見の際は、田毎に立て札をしたうえで案内することも確約されている。領主・代官はこの内見帳をもって領主の検見を実施する。

領主の検見には、百姓・村方は検見に必要な「検見道具」、つまり坪刈の道具を準備することが義務づけられていた。下馬伏村の享保八年（一七二三）の事例では、この年の検見が九月一〇日頃から予定され、八月二三日付けで百姓・村方に触れられている。これに次いで九月六日に代官所手代らによる小検見の実施が廻状で触れられ、坪

刈の道具を揃えて手代らを出迎えることが指示されている。このときの坪苅の道具は、いねこき・箕・新品の筵・新品の草履・まめとばし機・升掻きと一升・五合・一合の三種類の枠であつた。⁽²⁾

また、さきに検見仕法のところに見られた小検見は手代らによる検見で、代官による大検見に先立つて同じ様式で実施される検見である。手代らは内見帳によりながら、村役人らの案内にしたがつて実収量を確かめながら作柄を査定する。この結果が検見帳である。

下馬伏村の標準石高は、上田一石五斗、中田一石三斗、下田一石一斗であつた(表3)。これらの根取は、『地方凡例録』の事例と同じであるから、それぞれ七斗五升・六斗五升・五斗五升となる。一坪の粃量は一升・八合六勺六才六・六合六勺六才六である。これを前提に下馬伏村の内見帳の記載をみると、坪苅で確認された収量の違いが二合・五合・一升二合などの坪当たりの合毛(粃量)で表示され、根取より低い事例もみられる。

ほしノうら	一合	壹番	源兵衛
一中田壹畝拾三歩	五合	貳番	源兵衛
こいノうら	五合	貳はん	太右衛門
一上田貳畝廿六歩	五合	貳はん	太右衛門
牛田	壹升貳合	三はん	同 人
一上田三畝歩	壹升貳合	三はん	同 人
ゑびひろ ⁽¹⁾	一升貳合	四はん	三右衛門
一上田八畝五歩	一升貳合	四はん	三右衛門

これらによると、『地方凡例録』の指摘するように、同じ上田でも村内の場所によつて実収量が異なつていたことがわかる。これが粃量であるから、実収米量は五合摺とすれば上田でも二合五勺と六合の二段階があつたことになる。これを上田一石五斗(一坪五合)と対照させると、「こいノうら」の場合は基準高の半作、「牛田」「ゑびひろ」は一合増の豊作であつたといえよう。

内見帳が百姓・村方の検見によることは、「内坪かり覚」と記された下馬伏村「ゑびひろ(い)」の「四はん 三 右衛門」に関する記録が残されていることで確かめられる。

内坪かり覚

あびひろい

一上田八畝五歩

老升式合毛
粃よりたし

三右衛門

この村内での坪茹を基にして、領主に差し出す前出の内見帳が作成された。その内見帳には、村方全体の集計が
されているが、それによると、坪刈粃量は上田一升二合・五合・二合、中田七合・五合・二合の三段階、下田四
合・二合の二段階であつた。内見帳には「右之寄」として上田・中田・下田に分けて粃量が書き上げられている。

上田合老町五反八畝廿七歩三厘

石盛老石五斗代

此分米式拾三石八斗三升六合

此内

五反三畝拾六歩

老升式合毛

五反老畝廿五歩

五合毛

五反三畝拾六歩三厘

式合毛

中田合老町七反式畝五歩五厘

石盛老石三斗代

此分米式拾式石三斗八升四合

内

三反三畝廿歩

七合毛

六反七畝拾九歩

五合毛

七反廿六歩五厘

式合毛

下田合五反八畝七步

石盛苞石一斗代

此分米六石四斗五合

内

壹反貳畝拾貳步

四合毛

四反五畝廿五步

貳合毛

ここに見られるように、実収では上田と同じかその一部よりも実収高の多い中田・下田もあった。さきの『地方凡例録』の解説にあるように、上田の標準稲量は一步（坪）当たりは一升であり、同様に中田は八合六勺六才六、下田は七合三勺三才三である。下馬伏村の内見帳の三段階、二段階の収量を平均すると、上田は六合三勺三才三、中田は四合六勺六才六、下田は三合となる。標準稲量を比較すると、下馬伏村のこの年の作柄はいずれも標準量を下回っている。米量（実収量）は五合摺りであるからこれの半分である。

下馬伏村では、享保一四年の坪苧稲量は上田・中田で三段階、下田で二段階であった。合毛の記載はそれぞれ三箇所・二箇所で坪苧が実施されたことを示している。これらを平均することで当該年（ここでは享保一四年）の実収量を算出し、上中下の稲量を基準に作柄の判断を行うのである。そのうえで取米高（年貢租率）が確定される。

延享二年の下馬伏村の「丑秋検見ニ付指上候証文」⁽²⁾には、内見帳を下敷きとして検見が実施されていたこと、それを前提に当該年の年貢高が決定されていたことを記している。

当丑為御検見御出被成候ニ付、内見帳ヲ以庄屋・年寄・地主共田毎ニ番付引合、銘々御吟味ヲ請別紙坪刈帳面ニ記候、所々ニ而坪刈御目ためし被成候処、坪竿正路ニ御入、籾拔ハ私共ニ被仰付候上目御記シ被成得心印形指上等ハ御悲分之義無御座候、然ル上者右出合メ私共内見之上江相加へ被成、有籾ヲ以御取ケ候積り被仰付候義、何者分ニ茂違背可仕様無御座候事、

これには、内見帳に基づいた坪刈、吟味結果の記録、百姓の手による刈り上げた稲の籾抜（稲から籾を抜き取る
ことか）、升目の確認のうえで、その「出合メ」（出合目、実収）を内見籾に加えて有籾を出し、「取ケ」（取箇）を
付けることが明記されている。

同様の事例は検見制の施行された近世の村で一般的にみられる事態である。前出の表1は摂津国西成郡十八条
村・海老江村、河内国丹北郡出戸村など畿内の村々で施行された内見・検見の合毛付の事例である。表3の石盛と
併せて参照されたいが、それぞれの村の合毛は下馬伏村と同じように、標準の合毛よりも低かったこと、またいず
れも田方等級ごとに二段階以上の合毛付があったことが確かめられる。²³

三 畝引検見制と仕法の特質

近世の検見制は年貢米高を算出・確定する方法であるが、何よりも検地とそれにより設定された石盛・石高を前
提にしていることが重要である。畝引検見の仕法もまたそれを前提として、坪刈と籾量をもとに年貢米を算出する。
ここで留意しておかねばならないことは、籾量の算出はその年の検見の結果を基にしているが、作柄の判断は検地
石高、いわゆる根取米を基にしていることである。それゆえに、根取米よりも現実の籾量（米量）が少ないとき、
引高を算出しなければならないところに検見制の特色がある。²⁴

そこで、さきの内見帳・検見帳を参考にして、畝引検見制の仕法を検証しておこう。

まず下馬伏村の事例からみよう。内見合毛付をみると、上田・中田・下田の合毛はいずれも二段階・三段階で付
けられていた。これらをそれぞれ平均すると、五合摺とすれば上田は六合・二合五勺・一合で平均三合五才となり、
検地で設定された基準量の籾一升、米「五合」からはやや低い収量となる。また同様に、中田の三合五勺・二合五

勺・一合では平均二合三勺三才となり、中田の基準米量「四合三勺三才」と比べると二合少ない。さらに下田は平均三合であり、基準米量「三合六勺六才」との比較では、これもやや少ない収量となる。⁽²⁶⁾

畝引検見の仕法では、坪蒔の粃量が上中下それぞれ根取りの「当り合」のとおりであれば「壱歩の粃壱升」、中田であれば「八合六勺六才六」、下田であれば「六合六勺六才六」となるから、規定通りの粃収量がそれ以上であるから差し引き（検見引）はないが、これより少なければその不足分を差し引く。下馬伏村の享保一四年の作柄は標準を下回る不作であり、年貢米の計算に際しては差し引かれることになる。例えば、上田では粃量は平均して六合六勺六才六であったから、標準粃量の一升からすれば三合三勺三才四合の不足であり、その分を村の上田反別の合計一町五反八畝二七歩三厘から差し引くのである。⁽²⁶⁾

その反別は一反五畝二七歩であり、これが年貢賦課反別から免除される。石高は一石五斗九升三勺である。したがって享保一四年の上田の年貢賦課反別は一町四反三畝となる。同様に中田・下田も算出され、それぞれ免除反別は一反一〇歩、石高は六斗一升九合九勺余、一步余と石高三合六勺六才となるので、年貢賦課反別はこれらを差し引いた中田一町六反二五歩、下田五反八畝二二歩である。内見帳からの算出ではあるが、差引高の合計は六反六畝七歩、石高は二石二斗一升三合八勺六才となる。

これらを総反別三町八反九畝九歩八厘から差し引くと、残り三町二反三畝七歩八厘が年貢賦課反別として確定される。その石高は、総石高五二石六斗二升五合から二石二斗一升三合八勺六才を差し引いた残高五〇石四斗一升一合一勺四才である。差引高は免状には畝引高、残高は「毛附」として表示される。⁽²⁷⁾

別の村の事例をみておこう。一つは寛延三年（一七五〇）西成郡十八条村の内見である。この年、十八条村では同年九月に内見を行い、渡邊民部代官所に内見帳「当午歳晚稲木綿作御検見小前帳」を差し出した。⁽²⁸⁾ 記載例を掲げておく。

右之小前

正利

一上田七畝步

早五合

考

利右衛門(印)

同

一上田四畝步

七合

式

五兵衛(印)

同

一上田貳畝廿三步

早三合

三

久左衛門(印)

同

一上田四畝六步

早三合

四

傳右衛門(印)

(中略)

田寄

分米百貳拾壹石四斗壹升

上田八町九畝拾貳石拾貳步

内

壹石五斗代

○ 拾壹石三斗五合

○ 七反五畝拾壹步

苅

○ 貳拾壹石壹斗貳升

○ 壹町四反廿四步

早稻

○ 四拾五石四斗貳升貳合

○ 三町九畝十九步

七合毛

(中略)

右者当年之立毛御檢見二付、庄屋・年寄・地主立会、田毎二入念下見合付仕、帳面二引合差上申候、若後響キ義仕後日ニ露頭仕候ハ、何分之越度ニも可被仰付候、以上、

寛延三年午九月

十八条村庄屋

政右衛門(印)

渡邊民部様

御役所

記載形式は基本的にさきの下馬伏村の場合と変わるところはない。庄屋・年寄・地主立ち会いによる下見合付が行われ、差し上げたとある。「当午之立毛検見二付」とあるように、代官所からの検見に先立つて内見が実施され、その結果の「差上」である。下見合付は字地ごとに、また地主ごとに順番に行われた。

晩稲の検見であるとしながら、同じ上田でも合毛に「早」が付けられている事例があるが、これは早稲の作付け

表4 寛延三年十八条村の作付

種 別	石 高	反 別
	石	畝
諸引	307.385	3133.28
残高	44.438	723.12
田高	260.947	
苧上	149.976	1212.10
早稲	12.796	93.22
晩稲	29.246	262.05
木綿	99.636	[ムシ]98.12
木綿	8.498	58.01
畑高	100.636	1318.21
木綿	89.209	968.23
雑毛	1.427	149.28
屋敷	10.335	79.15

備考：「当午歳晩稲木綿作御検見小前帳」による

もあつたためである。この年の作付状況は、早稲・晩稲・木綿とその他の雑毛であつた。もちろん稲のうちでも晩稲を中心にしていたこと、また畑方の約九〇％で木綿の作付があつたことが特徴的である(表4)。ここでは木綿の検見を対象としていないので、詳しくは触れないが、木綿の作付は田方では極端に少ない。このことから綿作については田方・畑方での明確な作付区分がうかがわれることだけを指摘しておこう。²⁹⁾

これらを田品ごとに集計した部分が「田寄」の部分である。本田・

年寄
庄右衛門(印)
百姓代
市郎右衛門(印)
々
五兵衛(印)
々
源兵衛(印)
々
久右衛門(印)

新田・流作の上田・中田等の地区・田品ごとに、合毛順にまとめられている。この史料に基づいた寛延三年の内見内容は表1に示した。

史料と表1を参照すると、田方は上田・中田だけが表示され、下田の記載はないこと、合毛も上田で六段階に分けられているが、中田では五合毛のみ、また新田では二合毛のみであること、などの事実が指摘できる。これらは稲作の中心が上田にあったことを示し、百姓・村も上田の作柄に最も関心をもっていたことを示している。

延享元年 8 月		延享 2 年10月	
合 毛	反 別	合 毛	反 別
田方376石059	3604畝01歩	372石207	3556畝12歩
稲作			
1 升 6 合毛	117畝12歩	早稲 5 合毛	163畝09歩
1 升 4 合毛	186畝10歩	5 合毛	118畝07歩
1 升 1 合毛	590畝06歩	4 合毛	177畝29歩
1 升 毛	504畝06歩	3 合毛	349畝16歩
8 合毛	686畝15歩	2 合毛	365畝05歩
7 合毛	744畝24歩	1 合毛	91□畝27歩
6 合毛	397畝13歩	皆無	1436畝14歩
畑方105石240	1689畝06歩	91石837	15□5畝17歩
1 升 6 合毛	14畝22歩	早稲 4 合毛	113畝19歩
1 升 2 合毛	36畝08歩	4 合毛	4 畝09歩
1 升 毛	69畝22歩	3 合毛	68畝10歩
8 合毛	12畝06歩	皆 無	25畝20歩
6 合毛	10畝14歩		
流作畑 2 石619	87畝09歩	2 石679	87畝09歩
雑毛	58畝07歩	皆 無	42畝18歩
木綿 10斤	16畝17歩	皆 無	32畝08歩
稲 6 合毛	12畝[]	2 合毛	7 畝14歩
		皆 無	4 畝29歩

備考：延享元年「子年稲作・木綿作合付ヶ斤付ヶ毛揃帳」、延享二年「御細見御役人様ヨリ御好ミ之指出シ帳極 丑年田畑内見帳寄書扣」による。なお綿作および屋敷・流作畑は省略した。江口村の村高(文禄検地高)は553石850、反別60町 9 反 6 畝23歩、石盛上々田 1 石 4 斗、上田 1 石 2 斗等であった。

そこで、合毛付から実収との関係をみていくと、十八条村の上田は一石五斗であるから、最も高い合毛が七合毛であり、基準稲量一升と比較すれば、三合の不足となる。平均すると四合五勺であり、さらに作柄評価は悪くなる。いずれにしても、十八条村の寛延三年の作柄は不作であったことになろう。

毎年の作柄判定に百姓・村による内見が優先的に実施され、領主側の検見の下敷きとなっていた。領主の検見による作柄判定も内見に制約され、それに準じていた。坪刈の場所も百姓・村が設定しており、作柄の判定と年貢米量の決定に主

表6 十八条村合毛寄内訳

田方毛揃	石高	反別
	石	畝
苧	12.796	93.22
早稲	29.246	262.05
七合毛	49.336	357.18
(粃)	75.118	
六合毛	16.039	119.11
(粃)	21.486	
五合毛	15.376	106.00
(粃)	15.900	
四合毛	13.964	166.13
(粃)	19.972	
三合毛	4.170	44.00
(粃)	3.960	
二合毛	0.750	5.00
(粃)	0.300	

備考：史料は表1に同じ。

表7 海老江村毛揃(天保六年)

毛 揃	反 別	石 高
田方	畝	
苧 上	769.03	
一合五勺毛	669.01	
小 計	1459.24	石 粃 65.691
一 合 毛	3643.03	粃 109.233
五 勺 毛	3251.29	粃 48.7195
毛附合計	8352.26	粃 223.7035
附 荒	1715.04	
畑方		
苧 上	43.12	
一合五勺毛	65.02	
小 計	108.14	粃 4.881
一 合 毛	91.15	粃 2.745
五 勺 毛	168.00	粃 2.520
毛附合計	367.29	粃 10.146
附 荒	49.02	

備考：「当未立毛御検見内見帳」による。

導権を保持していたことが確かめられる。

それに加えて、畝引検見制では坪苧と反当たり収量、それに対応した取米は固定されていた。これは直接的には近世初期における豊臣政権の田方等級と斗代の設定に起点があるが、それを引き継いだ徳川政権による根取米の固定である。畝引検見制では、実収量が上田・中田・下田の斗代よりも少なければ差し引くが、逆に多かったとしても標準収量（根取）以上の年貢米を徴収されることはない。標準収量は年貢米徴収の上限であって、百姓は石高設定以上の年貢米は徴収されないことの表示である。

これに対し、有毛検見は実収高に基づいた賦課と徴収があった。そのため毛揃は田方上中下を無視して表示される。それが表5に掲げた延享元年（一七四四）・二年の摂津国西成郡江口村の毛揃であり、また表6・7の十八条村・海老江村の毛揃である。延享元年は神尾若狭守春央が有毛検見の実施を意図して畿内・西国を巡検した年である。江口村はその好事例である。また十八条村・海老江村の事例は畝引・有毛共に内見の仕法は同じであるが、そ

の毛揃の仕方が相違していたことを示している。⁽³⁰⁾

檢地石盛・石高に規定された徴租法、ここに畝引検見制の持つ「百姓成立」に果たす役割と特色がある。徳川政権が意識していたかどうかは別にして、成立当初の不安定な百姓を安定させ、領主側が年貢米を安定的に収納するために好都合の徴租法であった。その意味で、畝引検見制は百姓の維持と保護、「自立」を促す役割を担った徴租法であり、寛永期から元禄・享保期まで維持された徴租法であったことに歴史的な意味が示されている。

おわりに

近世の検見制には、百姓側に必要最小限の取り分を確保せうえで、その余分を年貢に取るという領主側による「百姓」保護の基調、原則があつた。その原点が天正一四年の法令第三条での規定である。そこには凶作の判断基準が一反に米一斗であること、その年の実収量が一斗以下であれば年貢賦課・徴収は免除し、一斗以上は平年作と同じく二対一の配分で徴収することが規定されている。同様に『本佐録』の「百姓の仕置の事」には、百姓に一年の農耕生活に必要な入用の見積もりをさせ、それを確保せうえでその余分を年貢に収納するという「仕置」の原則が確認されていた。『本佐録』には、「扨一年の入用作食をつもらせ、其餘を年貢に収べし、百姓は財の餘らぬ様に不足なき様に、治る事道なり」とあるが、これは近世領主の苛斂誅求を示すというよりも、百姓に経営を維持させながら安定的な年貢米の収納という意図を端的に示しているとみるべきであろう。

このような年貢米徴収の原則は、豊臣・徳川政権の発令した天正から寛永末年までの法令と関連させてとらえると、領主側が小農自立・小農民経営の自立政策と称される「百姓」を育成・保護する基調を持っていたことの現れとみることができる。近世領主政権の政策基調は、つまるところ年貢米の安定的確保の政策に示されるということ

であろう。政策基調の確認は「小農自立」の確認ではなく、安定した年貢徴収体制の確立と維持の確認にある。³²⁾

これまで述べてきたように、「百姓」は領主権力が自らの存立の基盤として位置づけ、近世初頭の検地によって独立の経営体として創出した。それゆえに、近世領主は「百姓」を安定した年貢・諸役の負担者として、小農経営体として育成・維持し、保護する必要があった。そこに検見制、特に畝引検見制の徴収仕法が用いられた根拠がある。領主層の最大関心事の年貢賦課・徴収においても、領主層が百姓の経営を維持させ、破綻を招かないようしながら最大限の年貢収納を実現しようとしていたことを注記しておきたい

註

(1) 深谷克巳『百姓成立』（稿書房、一九九三）

(2) 池享「戦国期の地域権力」（歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』第五巻、東京大学出版会、二〇〇五）。氏は支配・統制に対して、百姓側もその状態を受け入れ納得するべき状況があったことを指摘しているが、受け入れる態勢も視角に入れた分析検証が必要であることは、筆者も異論がない。

(3) 『本佐録』の百姓仕置にも「毎年立毛の上を以納事」と記され、「余らぬ様に、不足なき様に」治めることが肝要とある（『日本経済叢書』第一巻所収版、以下引用はこれによる）。年貢米を作柄の善悪に応じ、徴収することは豊臣政権・徳川政権を通じて、近世年貢徴収の基本原則であった。

(4) 「幕藩制第一段階」の徴租法が畝引検見制であるとして、その段階的位置づけが強調されたゆえんもこの保護

育成的な側面にある。政策基調論の観点からの研究はその中核にある。安良城盛昭「幕藩体制社会の成立と構造」、佐々木潤之介『幕藩権力の基礎構造—小農自立と軍役—』（いずれも御茶の水書房）、森杉夫「近世徴租法の転換—畝引検見取法から有毛検見取法へ—」（大阪府立大学紀要「第一二巻」等参照）。

(5) この点については、すでに部分的に検討したことがある。渡邊忠司「幕藩制的徴租法の成立過程—畝引検見制の歴史的位置—」（『歴史評論』三六九号、一九八一）参照。また二公一民制については、三鬼清一郎氏「太閤検地と朝鮮出兵」（『岩波講座日本歴史』9、一九七五）をはじめとする損免規定の観点からの研究がある。その見解には筆者は必ずしも同意していない。これについては別稿で検討する予定である。

(6) 検地は、いわゆる土地調査であり、これによって百姓は高持か無高に区分され、年貢の負担義務を負わされた

が、逆にこれは領主自身が自由で恣意的な年貢収奪の可能性を自ら否定したことになる。上中下の反当たり収量の設定は、どれほど作柄がよくても設定以上は絶対に取れないからである。たとえ一時期、いわゆる剰余労働部分の完全な収奪があつたとしても、それはまさに一時期であつて、その可能性は石高制（反当収量の石高表示）によって否定されているといえよう。

- (7) 『本佐録』が「百姓の仕置の事」に記した仕置きの仕方、領主自身がこれを認めていたことを示していると解釈される。

- (8) 大石久敬著。近藤出版社日本史料選書版。一九六九。以下『地方凡例録』からの引用はこれによる。

- (9) 『地方凡例録』上巻、一四三頁。

- (10) 同、上巻、一五六頁。

- (11) 前掲『本佐録』、その「百姓仕置の事」参照。「古」とは、秀吉をも含むそれ以前の「古」の意味である。

- (12) 『地方凡例録』上巻、一六七頁。

- (13) 同書。なお東出戸村の享和三年（一八〇三）九月「当亥秋田方内見合附帳」の奥書には、「右者当亥田方晚稲稲作之分村役人・地主立会一筆限植之内坪苅仕、無依怙鼻眞明細二内見合付仕候处、書面之通二御座候」と記す。この文言は他村々の内見帳奥書も同様である。後述下馬伏村の内見帳参照。

- (14) 『地方凡例録』では、これに五公五民を根取米とする。と、七斗五升の二分一の計算となり、稲高では二合五勺となる。その場合はこの二合五勺が基準となる。基本的

には同じである。次節参照のこと。

- (15) 『地方凡例録』上巻、一七一頁。

- (16) 畝引検見は、検地の石高・等級・石盛に忠実に従つた年貢米の徴収を行う徴租法である。その点において検地・石高制に対応した徴租法であり、領主権力が百姓を自立経営体として育成・維持する政策基調に対応した徴租法であつた。畝引検見制が幕藩制社会第一段階に対応する徴租法とされる所以である。拙稿「幕藩制的徴租法の成立過程」（『歴史評論』三六九号）参照。

- (17) ただし、なぜにそうであるかは必ずしも明確ではなかつた。多くの場合、森杉夫氏らの研究にみられるように、剰余部分の完全な収奪などという観点から位置づけが多かつた。その場合、石盛の設定が当該時期の生産力よりも高く設定されたために、剰余部分の収奪が可能となつていたと確定する「定法」があつたようにみえる。森杉夫「近世徴租法の転換―畝引検見取法から有毛検見取法へ」（『大阪府立大学紀要』一二巻、一九六四）、同「近世における徴租法の転換―畿内綿作徴租法を中心として」（『史林』第四八巻一号、一九六五）。なお同氏「近世徴租法と農民生活」（柏書房、一九九三）に所収。

- (18) 『地方凡例録』上巻、一六七頁。

- (19) 享保八年（一七二三）の記録には、「当立毛爲御検見来ル十日頃ヨリ御廻以被成候間、例年之通検見帳仕立置可被申候」とある（『門真市史』第三巻、一一〇五頁）。検見に際し、内見と内見帳が領主側の検見に先立ち仕立てられていたことを示している。それにしても、不思議な

ことに、多くの自治体史においても検見の具体的な過程の叙述は多くはない。筆者は『枚方市史』第三卷第三章『門真市史』第四卷第一章において詳述した。参照されたい。

- (20) 「享保十四年閏九月酉年内検見田並合毛附帳」(『門真市史』第三卷近世史料編、二二六—二二九頁)。

- (21) 「享保八年卯ノ年正月日御触状写帳」(『門真市史』第三卷、二〇五—一六頁)。

- (22) 『門真市史』第三卷、二二九頁。

- (23) 摂津国西成郡江口村については江口乃里文書、十八条村については藻井家文書を参照。なお渡邊忠司「近世中後期の有毛検見制の仕法について」(徳永光俊・本多三郎編『経済史再考』、大阪経済大学日本経済史研究所開所七〇周年記念論文集、二〇〇三) 参照。

- (24) 『地方凡例録』では、畝引検見制の仕法を有毛検見制と比較しつつ解説し、畝引は「古法」であり、検地による等級と石高に基づいた徴租法であることを強調している。これに対し、「中古」つまり享保以後の検見制は有毛検見であり、それは検地石高・等級・石盛による上中下の根取米を無視し、まさに毛見・坪苅での粗量と作柄の豊凶そのものに従った徴租法であった。有毛検見の仕法については、前掲「近世中後期の有毛検見制の仕法について」を参照されたい。

- (25) 『地方凡例録』上巻、一六八—一六九頁参照。畝引の

仕方を解説している。

- (26) その意味から「畝引」と表示されるとみてよい。なお関東・畿内では反取・厘取の仕法の違いがあることも『地方凡例録』ですでに指摘されている。

- (27) この場合、免状の石高に「検見引」と肩書きされている事例が多い。

- (28) 藻井家文書。なお十八条村の史料はいずれも同家史料による。

- (29) 本田畑への綿作作付けの禁止が知られるが、これはいわば一般的な作付けの拡大に対応した禁止である。田畑での作付けが明確に区分されるようになった時期の確認が必要であろう。

- (30) 畝引・有毛検見の仕法の相違については、別稿で検討を予定している。

- (31) 『日本経済叢書』第一巻による。

- (32) その意味では、当時、政策基調論の延長上で小農自立の実態解明を目指していた諸研究は、その目指すところをもとめずれたものであったといえよう。佐々木潤之助氏は『幕藩権力の基礎構造』でこの点を精力的に追求したが、その実証密度および論理的構成の緻密さは敬服に価するとしても、小農自立の満面開花の抽出に成功していないことはそれを証明している。そこでは年貢米の賦課・徴収の実態解明は、あくまでも付属的な位置づけに終始しているようである。

